



第114号

北海道ポーランド文化協会 会誌「ポーレ」

2025.1.5

ポーランド「BENE MERITO」名誉勲章 受章！

このたび、安藤厚教授にポーランド共和国外務大臣より「ベネ・メリト」名誉勲章が授与されましたことをここに心よりお慶び申し上げます。授章式は8月8日、札幌市資料館で開かれたワルシャワ蜂起博物館展「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」のオープニング記念式典において執り行われました。

安藤教授が2006年より会長を務めておられる北海道ポーランド文化協会は、日本におけるポーランド文化普及のために大変活発な活動を推進しています。このたびの受章をお祝い申し上げますとともに、今後もますます有意義な活動を共にできますよう願ってやみません！（ポーランド広報文化センター）



受章にあたって 安藤 厚

このたびは、栄えある「ベネ・メリト」名誉勲章を頂き、誠に光栄で、深く御礼申し上げます。

この受章は、本協会の活動がポーランド文化の紹介・普及に貢献したと認められたもので、現在および過去の本会会員のみなさま全てと共に感謝し喜びたいと思います。

本会の創立は1987年10月に遡ります。創立の端緒の一つは、ウッチ工科大学学長、ウッチ・ポーランド日本協会会長を務められたイエジー・クロー教授と、当会初代事務局長・吉田宏北海道大学工学部教授との学術上の交流にありました。



=写真= 授章式：来賓・協会のみなさまとともに

協会の発足にあたり、初代会長・今村成和先生（元北海道大学学長）は「北海道」と「文化」に焦点を当てることを強調されました。

初代副会長・遠藤道子先生は当会創立以前に日本シヨパン協会北海道支部設立にも尽力されました。

第二代会長・谷本一之先生（元北海道教育大学学長）は北方少数民族研究者で、1980年代に「ピウスツキのロウ管」から復元されたアイヌ民族の音声資料の分析に参加されました。2013年にポーランド共和国により白老にブロニスワフ・ピウスツキの胸像が建立されて以来、ピウスツキ記念行事は当会の継続的な活動テーマの一つになっています。

そのほか、ポーランドの映画・音楽・文学作品の紹介などが、近年の当会の主な活動分野です。

私どもは会員100人弱の小さな会ですが、これからは当地におけるポーランド文化の紹介と普及に微力を尽くすことをお約束して、お礼のご挨拶とさせていただきます。

（あんどう・あつし、北海道大学名誉教授、会長）

ワルシャワ蜂起80周年記念特別展 札幌市資料館 2024/8/9-30

オープニング記念式典

8月8日、ワルシャワ蜂起博物館特別展「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」のオープニング記念式典が催されました。同展ではドイツ占領下のワルシャワ蜂起および戦後復興期のポーランドの首都について語られています。札幌開催は広島、大阪に次いで国内で3番めです。

式典では、ワルシャワ蜂起博物館副館長パヴェウ・ウキェルススキ氏はじめ、ポーランド広報文化センター、北海道、札幌市の来賓の挨拶があり、式典のあと副館長の案内で展示ツアーが行われました。



特別展を観て 石田 レイ子

「ワルシャワ蜂起は最も論争的で、これからのどの時代にも取り上げられ、その一方で決して結論が出ないテーマの一つであろう」ポーランドの歴史学者ガルリツキのこの言葉は長く私の胸に突き刺さっていた。

2018年秋、私の2回目のポーランドへの旅が実現した。その時初めて「ワルシャワ蜂起博物館」(2004年開館)を訪れ(1944年夏のワルシャワ、当時の恐怖、決意、緊張、遺族の慟哭等)を体験し激しい衝撃に圧倒された。その時「この蜂起は正か誤か」「勝利か敗北か」の二元論は成立不可能だと確信した。

今年8月、札幌市での特別展「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」(主催:ワルシャワ蜂起博物館)に駆けつけ、「蜂起はポーランドの歴史の必然」と強く実感した。同時に蜂起終結後の10年間蜂起参加者とその関係者へのソ連の弾圧(不正裁判や差別・迫害)、その犠牲者達の苦悶の姿に言葉を失った。

大通公園に面した広い会場で静かに集中的に蜂起の時系列と市民達の苦悶の姿の精密な説明文、豊富な統計資料、命がけの写真を徹底的に辿ることができた。そのせいか、現在も続くロシアのウクライナ侵攻が私達の思考を締め付けているせいか、2018年の体験と比べて札幌では「蜂起終結後10年のワルシャワとポーランドの生死の接点での歴史的苦難」が最も強く胸の底に刻まれた。私の歴史学習の欠落と空白に後悔するばかりである。

ポーランド国民は共産党政権下のどん底を潜り抜けて1980年代「連帯」運動の勝利を勝ち取り、89年東欧革命の突破口を切り開いた。新たな「ポーランド共和国」の出発は20世紀の歴史的偉業であることは繰り返すまでもない。それは21世紀の世界で希望と平和の開拓を模索しようとする地球市民を絶えず鼓舞して止まない。

頂いた分厚いカタログは、虹の会会員で有り難く共有させていただきました。

(いしだ・れいこ、新潟虹の会会員)

《第113回例会》
朗読会 報告

第13回 午後のポエジア 札幌市資料館 8/18

第13回「午後のポエジア」が「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」展と連携して8月18日に行われた(参加者31人:うち会員11人、ポーランド人6人)。テーマは“語り継ぐ言葉としての、戦争、崩壊、復興、平和”である。

第1部



まず登壇したのは林祥史氏 =左写真=、生誕百年となるズビグニェフ・ヘルベルトの作品「おばあちゃん Babcia」。お婆ちゃんの膝の上で、世界のすべてのことを話してくれる。けれども自分の話はない。大量虐殺のことやアルメニアのことを話さない。呪詛と忌憚を除いた言葉のザラザラの底辺。

次いでムラサキ紫音氏 =次写真左2= は、米倉齊加年作品「おとなになれなかった弟たちへ」を読み上げる。親戚に情報を仕入れに行くと“食べ物はない”と追いつ返される時代。見つけた疎開先には赤ん坊ヒロユキのミルクがない。時々お母さんに黙って舐めていた甘いミルクだけど、彼のたった一つの食べ物。入院した病院で栄養失調で息を引き取った。遺体を背負う母は、爆弾で身体がバラバラにならなくて幸いという。用意されていたお棺に入れようとする小さくて、膝を折り曲げながら、ああ大きくなっていったんだ、と。

村田譲氏 =左6= は竹内浩三作品を紹介する。映画監督になりたかったが兵員不足で大学を強制

的に卒業させられフィリピンへ、23歳で戦死した。作品「冬に死す」「日本が見えない」「ぼくもいくさに征くだけけれど」、そして書きなぐられた6行の絶叫「詩(うた)をやめはしない」と。作品「骨のうたう」一戦死やあわれ とおい異国で ひょんと死ぬるや国のため大君のためと 骨は誉れ高く勲章をもらうけれど 骨を愛する人はなし 骨は粉になり なんにもなしになった―。最後に自分も長生きをしたいとの願い「宇治橋」を渡る。

建部奈津子氏 =右3= は、自ら朝鮮に流れ着きシベリア抑留を体験した神馬文男作品を取り上げた。「知ってるかい」、「短歌で綴るシベリア抑留」の“窓の氷雪花”に“ダモイと指字で溶かす”。ダモイとは家に帰るという意味のロシア語。(次参照)

菅原未榮氏 =左7= は自作詩「幻野〜一升瓶と蜜柑箱」を。蝦夷開拓期一人も欠くことなく子どもを育て正月を迎えた。しかし戦争に負け、爺の危篤の時に一人欠いてしまったのだ、と。

堀きよ美氏 =右7= が大平数子作品「慟哭」を声にする。逝った人は帰らない、生き残った人はどうするといひ、何を分かればいいといひのか。風よお前、世界中を旅するならば、未だ待っていることを伝えておくれ。正義とは剣ではなく愛であると伝えておくれ、と。



第2部

後半では、シルヴィア・オレーヤージュ氏 =右4=がアンナ・シフィルチンスカ作品「バリケードを作りながら」を。銃火の恐怖に人々は恐れる、少年が倒れ恐れの下にバリケードを築く。自分が太陽となれる今に。次いで佐藤レミア氏 =右5= がシフィルチンスカの画像を背景として、ちいさなはっきりとした声を

前へと押し出してくる。

ラファウ・ジェプカ氏 =右1= はタデウシュ・ルジェーヴィチ作品「生きていたものが死んでいった」*を朗読する。死体に卵を産み付ける蠅、死の直前の父の唇と目と、身体が肥大し始める。林檎を売っているサルチャの近くのゲートが炸裂する、林檎が潰れ母が死ぬ。ゲッターに林檎を運ぶものも欲しがるものもいなくなってしまう。

レナタ・シャレック氏 =右6= がチェスワフ・ミウオシュ作品「カンポ・ディ・フィオーリ」*を。この広場でジョルダノ・ブルーノは火焙りとなりやがて人々は酒場へ移動する。思い出すのは壁の向こうのゲッターに砲弾が、そして炎に踊る女の子を笑うのだ。群衆はワルシャワでもローマでも変わりはない。孤独に死するものへの詩人の言葉が反逆を煽る。

(村田譲、運営委員)



知ってるかい 神馬 文男 作
君 知ってるかい
八月十五日のことを
砲声止み銃捨てて
虫たちが合奏した日だよ
突然の玉音放送
直後の特攻出撃
同じ釜の飯を喰った
戦友(とも)が爆弾抱いて
散らされた日だよ
君 知ってるかい
ボクは抱かず散らず
シベリア三悪を
舐めさせられた日だよ
静まりかえった頃
彼の姪が鳴々して
ボクを訪れ
"八月十五日の特攻隊員"に
ペンを走らせた
君こんなこと
誰に何て話せばいいんだ
知ってたら
みんなとボクに教えてほしい

【解説】いま言っておきたいこと 神馬 文男

昭和20年8月15日に太平洋戦争で敗れたことです。日本軍は全占領地域で武装解除され平和が戻り、秋の虫達の喜び合う合奏が聞こえてくるのです。一般兵は軍服を作業衣に銃を鉞に持ちかえるのです。

玉音放送とは、8月15日終戦の正午に天皇が敗戦と再建についてラジオ放送をしたことです。

特記したいことは、玉音放送の5時間後に宇垣長官(海兵40期)率いる海軍機11機と部下23名が十死零生の特攻出撃したことです。岩国で私と同期班(22分隊7

班)の戦友(とも)大木正夫兵曹(福島県出身)が命により爆弾抱いて米艦に体当たり、花と散った日です。私も一歩違うと同じ運命だったと思います。然も終戦後のことです。こんなことを誰に何と話せばいいのでしょうか。

スターリンは日本との中立条約を一方的に破り、8月9日、日本の国土と国民を欲しいままに蹂躙し、そればかりか終戦後の8月23日に日本人(男女少年も含む)を拉致し、シベリアの三悪を舐めさせたのです。私はそれから3年ほどドダゴ第一収容所のテント小屋で生活することになります。



神馬文男氏 19歳頃

短歌で綴るシベリア抑留 神馬 文男 作
採炭の天崩れきて血まみれの
兵眼開きお母と叫べり
シベリア抑留で、スーチャン
地区四十五番炭鉱での死亡
事故。露人は、ノルマ、ノル
マで日本兵を酷使した。
ラーゲルの窓に咲きたる氷雪花
ダモイダモイと指字で溶かす
極寒のラーゲルはテント小
屋だった。ウソのような本当
の話。ダモイが最大の希望で
ある。
特攻を志願せし時送りたる
写真色あせ仏壇にあり
特攻とは特別攻撃隊のこと。
特攻は十死零生である。終戦
近くに私も一歩前に出て志
願した。

* <https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicctn/70/nishi.pdf>

花と散った朋友大木正夫兵曹の姪(道脇紗知さん)が来札して、ともに過ごした予科練時代の彼の足跡を辿りたいとペンを走らせました。紗知さん著の『8月15日の特攻隊員』は光人社 NF 文庫で取り扱っています(2024年8月発行)。

書きたいことはまだまだあります。あんなこと、こんなことを、平和を願いながら命の続く限り書き続けて、あなた方に役立ちたいと願っています。

(じんば・ふみお、生涯学習出前講師、98歳、シベリア抑留体験者、札幌市在住)

第 114 回例会 (どなたもご参加歓迎)



ポーランド名作映画ビデオ鑑賞&交流会 2025

『イーダ Ida』 2013 | 82分

ポーランド/デンマーク/フランス/イギリス

第 87 回 (2015) アカデミー賞外国語映画賞
ワルシャワ国際映画祭グランプリなど受賞多数



2025. **3/19** (水)

18:30~ 入場無料

札幌エルプラザ 4F 中研修室 (北8西3)

予約(推奨)お問合せ先 ☎080-4071-0956 (安藤)

✉ hokkaidopolandca@gmail.com



パヴェウ・パヴリコフスキ監督 (1957~)

オックスフォード大学で文学と哲学を専攻、のち英国などでドキュメンタリーを製作、その後劇映画や脚本に進出し欧米で高い評価を受ける。代表作は初めて母国でメガホンを取った本作のほか『イリュージョン』2011、『COLD WAR あの歌、2つの心』2018 カンヌ映画祭監督賞 など



アカデミー賞授賞式で
photo: Lucy Nicholson /
REUTERS / Forum

お話: 坂尻昌平 (さかじり・まさひら) 映画研究者。早稲田大学大学院に学ぶ。共編著『ジャック・タチ』エスクァイアマガジンジャパン 1999、『ジャック・タチの映画宇宙: Jacques Tati』同 2003、『世界映画大事典』日本図書センター 2008、『淡島千景〜女優というプリズム』青弓社 2009、『渋谷実〜巨匠にして異端』水声社 2020

1962年のポーランド。孤児として修道院で育てられた18歳のアンナは、院長から修道女の誓いを立てる前に唯一の肉親である叔母ヴァンダに会うように言われる。ヴァンダを訪ねたアンナは、自分の本名がイーダでユダヤ人であること、亡き両親はどこに埋められているのか分からないことを知らされる。

イーダは出自の秘密を知るためヴァンダと旅に出て、戦時中に両親を匿っていたシモンを訪ねる。ヴァンダは幼い息子を姉でイーダの母であるルージャに預けたが、一家とともに殺されていた。イーダのもとをシモンの息子フェリクスが訪れる。彼は老い先短い父を安らかに眠らせてくれるならルージャらを埋めた場所を教えたと約束し、埋葬場所を掘り起こす。そして生まれたばかりでユダヤ人とは気づかれないイーダを神父に託したと告白する。イーダとヴァンダは遺骨を故郷の墓に再埋葬する。

イーダは修道女として生きていかねばならないはずだが、ヴァンダは…。イーダは旅の途中で知り

合ったサクソ奏者の青年リスと再会し2人は結ばれる。リスはイーダに結婚を申し込むが…

第二次大戦中には少数ながらイエドヴァブネ事件(1941)などポーランド人によるユダヤ人虐殺事件があり、スターリン時代末期には自国民を厳しく罰したポーランド女性検察官などがいた。本作はそうした負の歴史に目をつぶらず公平に描いた点に特徴がある。また、モノクロ/スタンダードの洗練された構図と素晴らしい撮影、詩的な映像の水準の高さは息をのむほどだ。台詞や俳優の演技・カメラの動きはミニマルで無駄がない。カトリック、ユダヤ人、ホロコースト、スターリン主義、ジャズというポーランドの特性が見事にマッチした作品といえる。

イーダ役のチュシェブホフスカは演技初経験とは思えぬ見事な演技を見せた。

これは修道院以外知らない少女が旅を通して成長してゆく教養小説でもある。

(池田光良、運営委員)